

最近私は「とろけるような」という触れ込みの商品を完全に無視している。「フワットロツ」の口当たりがヒットして以来、この手の食べ物が登場し続けているが、「珍しい」ことに価値があったわけで、そればかりが蔓延するとシンプルな味に立ち戻りたくなる。ついでに柔らかいものばかり食べているとボケる。私にとって音楽も同じだ。流行に囚われ、噛むことによって得られる本来の味わいが薄れているものがある。

それを先見の明で「本来に立ち戻ろう」としたのが「錦織健プロデュース・オペラ」であった。シンプルに且つ飽きが来ないように構成されていた。またアリベルト・ライマン氏の「メデア」が良かったのは、贅肉をそぎ落としながらも言いたいことは全部出し切ったところだ。舞台は「間」の使い方がものを言うと思う。そして歌の舞台で最近感じることは、編曲とプログラム構成がものを言うということだ。プログラムでは歌間の秒数と続く選曲によって気分が大分変わる。また曲のアレンジに凝るのはいいが、凝り方が違うのではないかと思えることがしばしばある。これ「作詞者と作曲者のことを無視していないか？」という感じである。新しいアイデアが出ないから既存のヒット商品を新ヴァージョンで販売する菓子の如く、世間的周知作品を自己流に変形して売っているようなものである。歌詞を変えたことで発生した紛争もあったが、作詞者は曲のイメージを感知して詩を作り、作曲者は詩の意味を感知し言葉の配列を生かして曲付けをしているのに、それをみじんも感じさせない曲のアレンジや歌い方は至極残念である。また曲中でルフラン箇所を自在に設定できる場合、短い詩のどこをルフランにするか。その詩の一番主張したいところが安易に流されてしまうのも至極残念である。私にとってそれはもはや詩でも曲でもなく、無意味な音の集合でしかない。その時私は作詞者や作曲者を気の毒に思う。その点シンガー・ソングライターのパップが爆発的なヒットを生むのは、両方が生きているからであると頷ける。

そして歌について、伴奏は音の流れ的に突然落とすことができない。聴いていて「あっ、ダメ！今の声の高さ、あと10秒もって」などと思う時がある。頂点が合わない。この場合、伴奏が歌に合わせるのではなく、歌の方が伴奏の音の頂点を読み取らなければならないと思う。その点、ピアノだけで伴奏するシャンソン・フランセーズは便利だなどと思う。もともと詩を語らせるための曲であるから、音の対応にも幅がある。

またコーラスは、私は知人が出演するものだけに限って行くが、最初から指揮者に目を吸い寄せられる場合には注目しっぱなし、そうでない時は耳だけで聴いている。けれど目を伏せていて「何だかボワーンとしていて元気ないなあ」と感じると顔を上げて指揮者を見る。すると指揮が硬いと感じる時がある。「う〜ん。一応振りの通りに歌っているよねえ」と自分の中で確認する。しかし指揮者から不要な硬さが取れたとき、歌が変わった！その時「あ、元気じゃん。歌い手の年齢のせいじゃなかったんだ！」と少し...どころか大分嬉しくなる。ここで指揮の大切さを改めて認識する。

ところで、私は最近コンサート会場で渡されるアンケートを書かない。それは営業的にどうすれば集客につながるかのご機嫌伺いだと思えるから。ところが先日しっかり書いたものがあった。それは「プログラムの区切り毎に」評価用の1〜5までの数字と共に、その評価に至った感想を書き込む空欄があり、最後に会場等を含めた総体的意見を書き込む欄があった。そこに主催者と演奏者の向上心が感じられた。(2013.7.14)